

妻は同窓会の夜、私の知らない 顔で帰ってきた

何も言えない夫と、饒舌になっていく妻の夜——和姦
NTR

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

彼女は、かつてこの街の空気さえも染めていた存在だ。三十代半ばという熟練された女性的な魅力を持ち、まるで誰のものでもないが、同時に誰にも見捨てられないような不思議な均衡を保っている。陽介の視線が彼女にまわりつくのを恐れるように、千夏は細長い指先でグラスの氷をそっと叩いて溶かし、その涼しげな音色を二人の間を満たした。

同窓会の会場は、盛夏の夜風に揺れる百合の花のような華やかさで彩られていた。しかし、それよりも強く記憶に残るのは彼女の香りだった。普段なら控えめに纏う香水ではなく、少し甘く、そしてどこか懐かしい、昔ながらの女性特有の体臭に近いもの。それは陽介の胸元にある、何年ぶりの鼓動と混ざり合い、彼の理性を少しずつ舐め食っていくようだった。

「お久しぶりね」

その口から漏れた声は、低音帯を含んで肉感的だ。彼は身を乗り出し、彼女との距離を一瞬だけ詰める。普段は気丈に見える彼だが、今や彼女の一言一つが自らの未練を暴露していることを、千夏だけが心臓の早鐘で察知していた

のだ。彼女はそれを隠す術もなく、むしろ陽介の頬を撫でてやる。指先の温もりが、三十代男性の顎のラインをそっと滑り落ちる感触は、まるで熱い火に手をかけたような錯覚さえ与えるほどだった。

二人の周囲には、他の元同級生たちの談笑やグラスの乾き音が溢れていた。陽介にとってそこは賑やかな背景音に過ぎず、真の焦点は眼前のこの女にしか映っていなかった。彼女が男を見る目をしていないふりをし、陽介もまたそれに乗って「いつもの再会」だと欺瞞を重ねていた。しかし、本当の夜が訪れるのは、まだこれからなのかもしれない。

「あれ？ 最近、君の視線ばかり離さないわよね」

千夏の言葉は軽やかだったが、瞳には深みがある。陽介は苦々しく、あるいは甘く笑みを湛えた。「いつも通りだよ」と返したが、その声はわずかに震えていた。彼は気づいていた。あの男、あるいはそこに潜む別の誰かへの視線なのか、それとも単なる慣れなのか見極めきれない迷走の中で、千夏だけが彼の心の隙間へと楔のように刺さっていくのだ。

会場から取り残されるように、二人は再び会話の世界へ戻った。彼女の肩線が陽介の首筋に触れた瞬間、電気的な痺れのような感覚が脊髄を伝う。それは触覚というより

も、魂同士の接触に近いものがあつた。陽介は自問する。なぜ今、この熟した女性の前に立っているのか。かつて失った何かを、あるいは新しい何かが手放されていく最中にあるような、儚げな状況だ。

彼女は空を見上げ、頬に浮かぶ汗粒を指で弾き飛ばす仕草をする。その動きは自然体でありながら、どこか計算されたような妖艶さを宿していた。陽介はその姿を追いかけるようにして身を預け、二人の間で張り詰めた糸が寸断されそうになるのを覚悟した。

「――」

静寂が突然訪れると、千夏表情が変わった。これまでの穏やかな笑みが薄れ、本物の女性としての鋭さが浮き彫りになった。彼女は陽介の喉元に唇を寄せ、冷たい氷の雫気ではなく、温かい吐息を直接肌にあてた。周囲の騒ぎが遠くへ退いていき、この二人だけが切り取られたような錯覚の中に落ち込んでいった。

彼は舌で彼女の耳垂れの裏側を優しくつついた。そこには、昔のままではいられない彼女への、そして彼自身の変貌への予感が込み上げてくる。千夏はそっと離れ、陽介の額に自分の額を重ねる。熱い皮膚同士の重なり合いが、時間の流れさえも歪めていくような感覚だった。

「どうする？ 戻れないわね」

彼女の問いかけは、単なる会話を超えて、行為へと至らないままのあの曖昧な境界線を揺るがす言葉だった。陽介は答えず、ただ彼女の手を握りしめる。その掌からは、盛夏の夜という名の蒸し風呂のような湿度と、何かが始まる前の緊張感だけが滲み出していた。



——ここから先は製品版でお楽しみください——